春日大宮若宮御祭禮圖 下

八波3
933
3ロ

門八湖
933
巻3止

宮城縣図書館

○春日若宮御祭禮略記

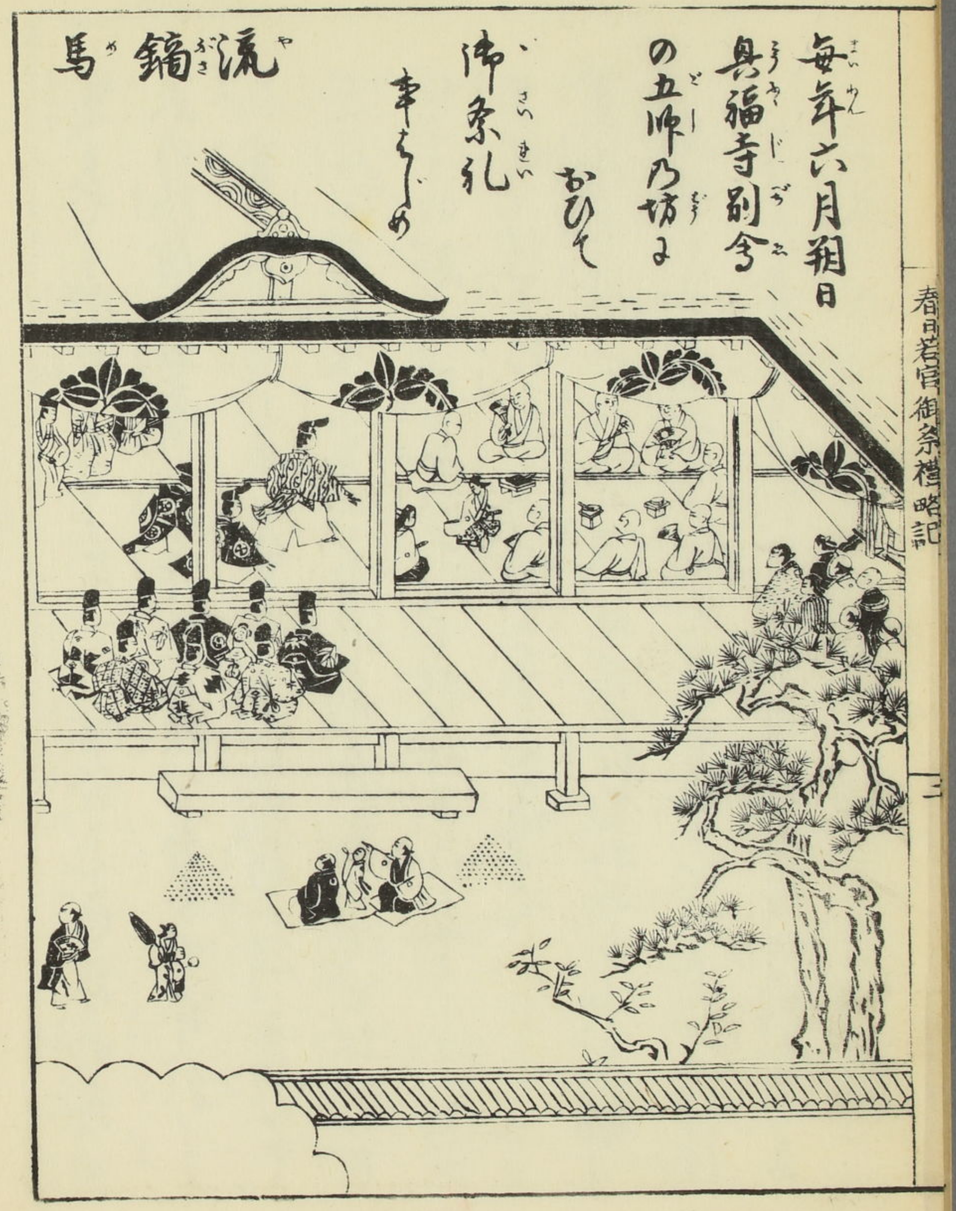
文亀那春日若宮御祭礼い人皇七十五代崇徳院の
御宇天下大飢渇三年打續き又大疫病ありて人民
悩み死せる者多くふ尤海そまきまらうて時の関
白法性寺忠通公はじめ御祭礼の大預を奥しぶられ
天下泰平五穀豊饒人民伎楽うるしまり和ら
忠通公雅くまし〳〵し附春日祭り大文祭り毎二月十一月申日勅使上卿
御束の伏をせさ勢行ひしまり且南社に崇敬の多績
世殖抽後まりの

一保延三丁巳年九月十七日子刻ニ御旅所ニ御幸
元久五戊申年まで九百年余
是より毎年九月十七日ニ行ひとゝどこ故障有て月
日の替り行り又去年今年と合て一年ニ五月十一月あり
有しもの　略て慶安三年より山王十一月二十七日
ニ定て出しゆゑ　又元禄十一年大宮の常行ハ
正徳二年十二月廿七日ニ行ひ廿八日後の騎ニ敷先
又治ハ能毎年て廿九ハ又十二月朔ニ有しゆ
又天和元年廿八日子刻ニ神りしゆ　重略
一毎年六月朔日ニ興福寺別当の五師の坊ハ力て流猶る

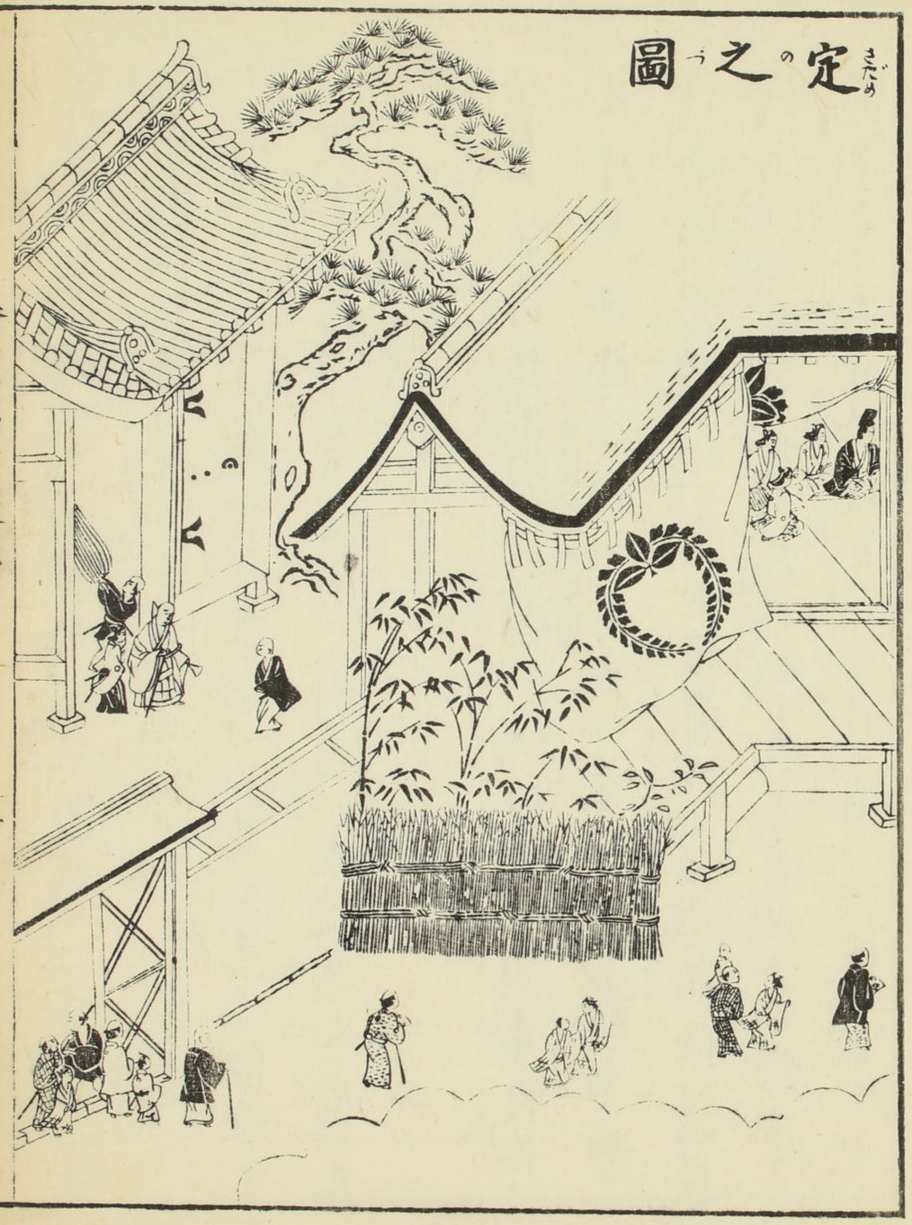
定て祭礼ハ先ハ山王合し当年ハ田
不の坊ハ力ニ和尚ハ毎年ハ書状を分ハ
人等も舊例ハ九月十七日当ハ行て
文名ハ毎年ハ書状の状を和尚ハ
仕丁和尚ハ沛奉行ハ敷在刀祢頭と名当の
立状を仕丁指系し玄関ハ玉掛り
事海ハ後一山饗應無無言ハ
五師ハ寺侍五人と撰んで一寺の事を
ハ一年替りハ別当を五人ハ次座を指別当と云
専当ハ中綱ハ書帯侍　仕丁ハ云人　侍

毎年六月朔日
興福寺別当
の五師乃坊より
おひて
神系礼
車ちめ

流鏑馬



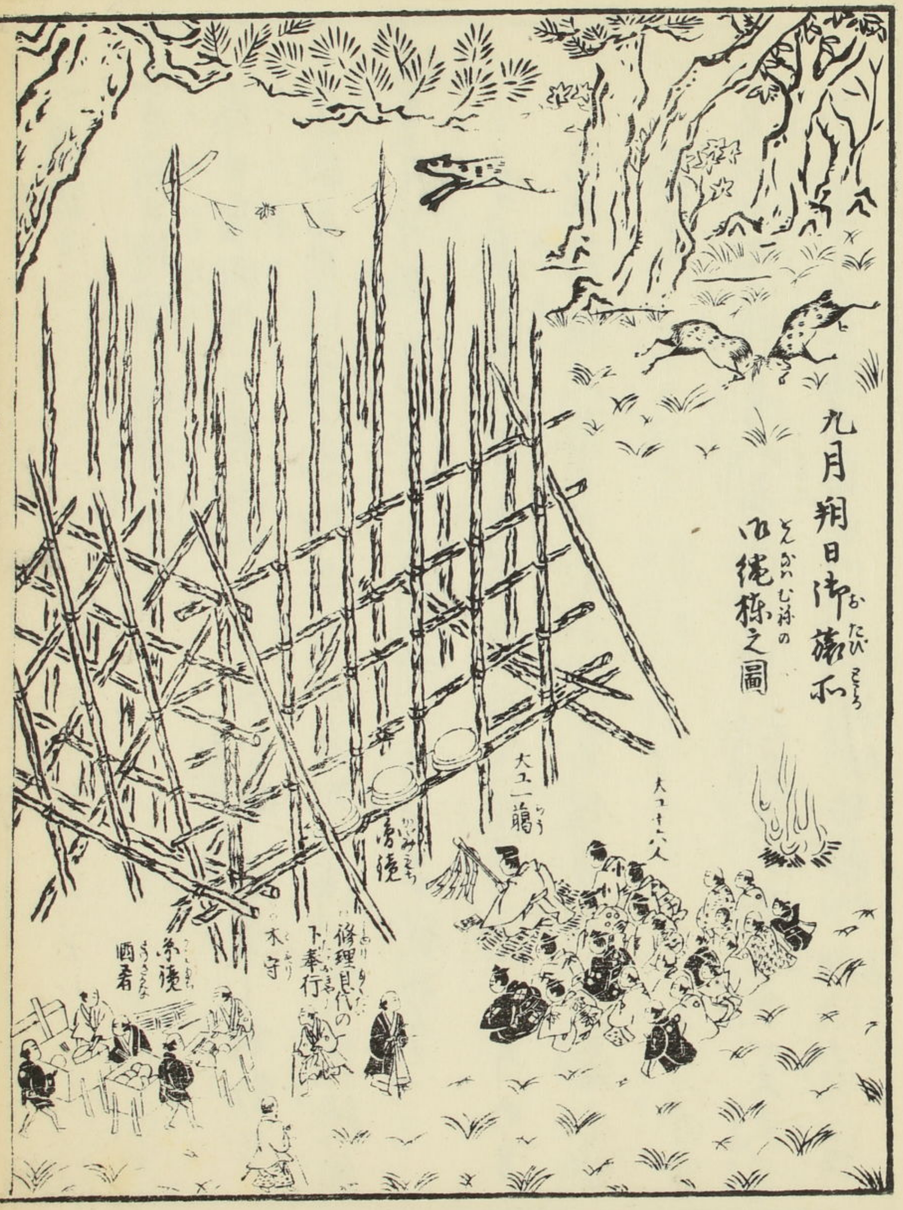
定之圖



一六月朔日より後新坊より集舍し田系頭坊へ仕丁を遣し
御幸行列へ。より後舍人多し
より後い。御祭礼薪御能。舊例と。ちり常りぬ法
新。妻尉の役。打刀を帯
奥福寺内ニ
新坊ハ。より後集舍の坊。

一八月十一日。御旅所。假御殿 并 法假殿の用木。方和
田中。十五 郡の内。年し木と習伐之 略す 則 南一郡
御奉行 出役人 并 東後郡の目代 成身院 西後郡の目
代 法花院 春日座の大工。杣十人。木を。役人 木。相方よ
り。来。木を改伐 来。 後 在 より。後郡目代

九月朔日御旅所
出後稚子神の
出後稚子之圖



へ運送す

一九月朔日神舞和繩揀在之

春日度大工　一鶴　風折　浄衣　十六人　烏帽子　素襖　着用し相勤む

東西為月代の下拵仕者也　神殿へ国境絵

をそなふ　ふくの大工まで　国境を拵り献あり

凡て春日大明神毎廿一年目御造替凡三年の日

大工諸職人　ふくまでふ殘　烏帽子素襖着し相

勤む

一十月二十九日預主人　三人　神師　教主　人内　三人　射手児一人　大君

不へ参り　翌晦り　立田川へ　風折　浄衣　ハリ仲方　始離行　風折大役ふ殘

一十一月朔日　隔年ゝ預主人　法貴寺村　三り余　末の方　天満宮へ　社

参　饗米右同断　但　教主人の門を谷川　黨年　参宿す　委奥記

大君所へ預主人の精進不ふり　餅　飯　夜　町まあり

一同日　教主人　春日社参　饗米　右同断　仕丁一人　先遣　鹿口の柴門

と云ふ

神前作法を　御奉行不の御師の祢宜方へ　饗膳を

一同日　御奉行不より大和国中御領大小之役不方へ

雑子　兎　狸　不へ出ふ　大君不　役人へ　知らせ

御神事ふ　ふ人　馬ふ　義へ　廿五日ゝ　奈良へ　参着ふ

被食　御鶴　状　有ふ　鶴探の方へ　ふ参ふ

一同日　四条法師　新屋　本屋ふ　ふ人て　編　本太鼓　高足

打参　殺し　坊屋の　坊へ　ふ　田不法師　奥ゝ記す

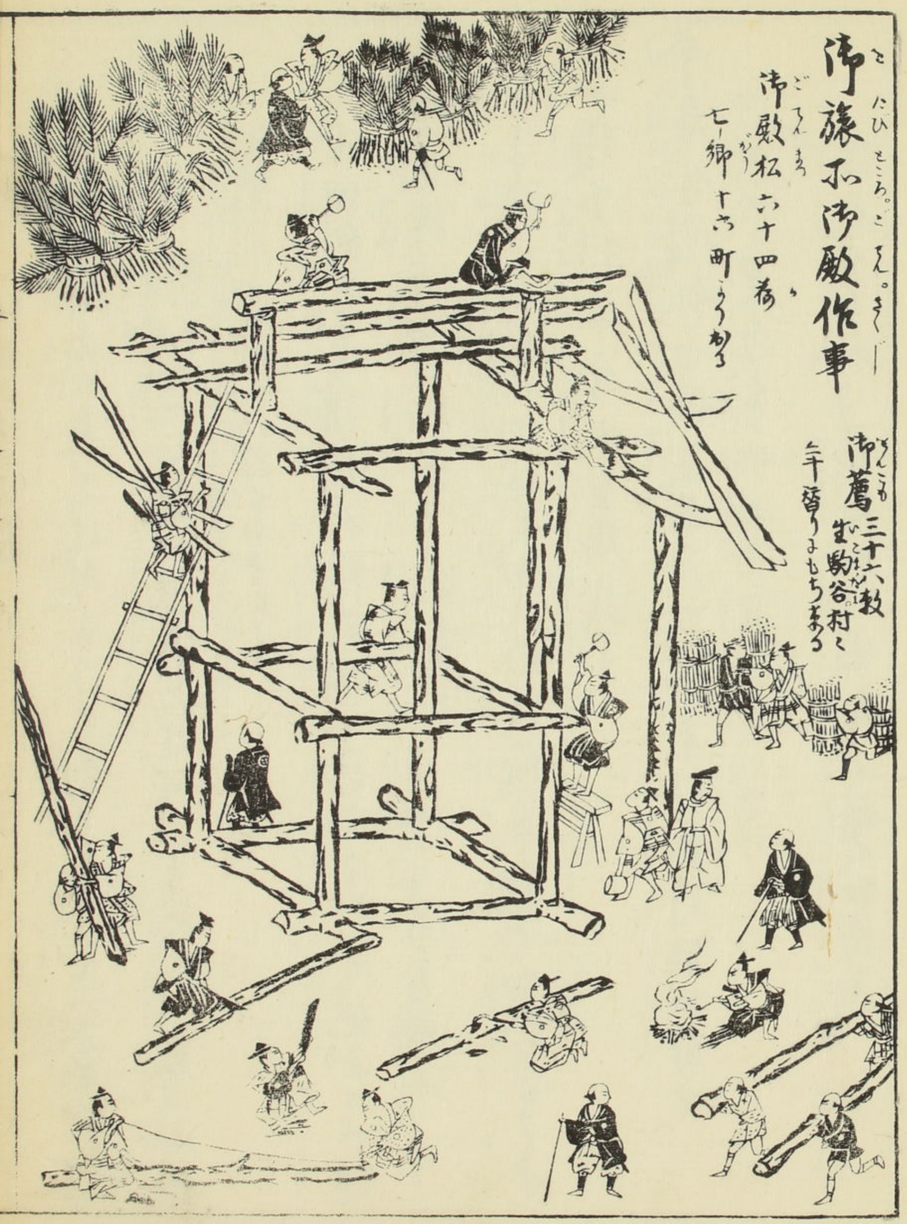
一中旬　別当五師より祭礼行列の次第書を認め、伝役人へ
当番わたすなり　御奉行所へ仕下ゆるし

一十六日　頭屋人　春日社家　饗米　右同断　右祢宜方より
直ふ春日菊之屋へ二夜三日家籠

一十七日　興福寺衆中より田原坊へ書状付

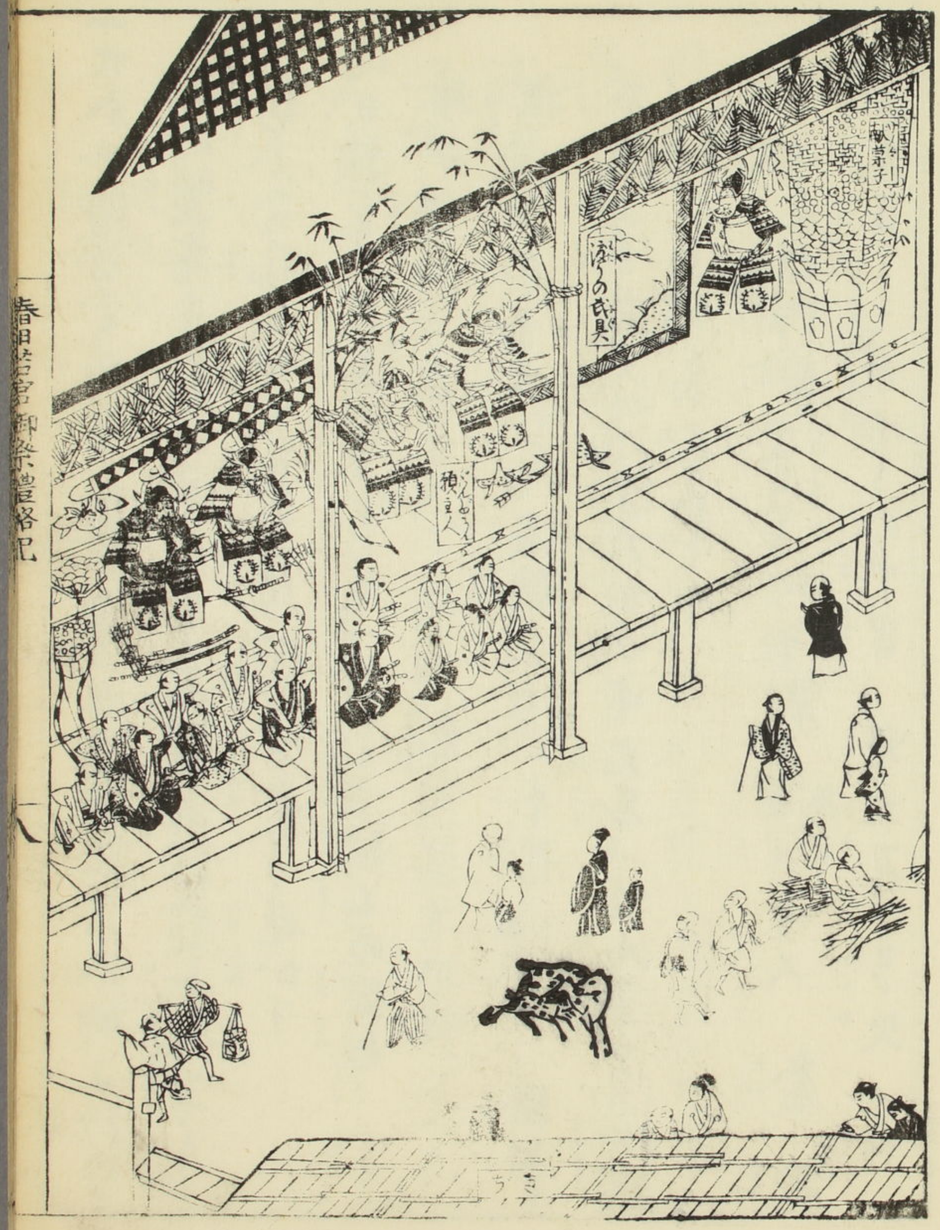
一中旬　十七八日　田原坊にて一山の僧侶寄合し、諸々停定相
御祭礼奉行　流鏑馬定より同じ　風略ス

一廿一日　御旅所仮御殿　并苅屋原御作り有之　春日座
の大工棟梁伝役人　御奉行所伝役人　俗世の妻同代
乃下奉行。本当ふ所あり



小殿上ぬりの上。奥芝辻町より古例にてあるべき上田村の山
より一刷余（乳の方）毎六月廿一日。奥芝辻町より彼所へ参り。ふ浄
を禁じ。廿日乱物参るよし
一。所田例より。俗役人。伝式些少の物とい人。他国を焼
よりも。滞り有。物参り。捐節む　事繁多有る為略す
亜して。御祭礼田例にて。ひくの役俗。耳物。まうのひ。ホそうす。
ふ殘下行米。ゆ下亜頂載之
一。今春。金剛。鄭世。保生。西座。御祭礼。薪御能。お勤ゆ
鄭世大夫。近年。御扱免有之
右
役者。入り。旅者ハ。町宅。年〻。勢人。お渡り

一。二十一日　預主人方。諸役人。殖〻。大君所人。お借り。精進入
薬醫門。を建て。注連を曳。鶏稈を禁も
一。御方。より。献ぜる所の雑ゆ免猩ホを
御奉行所より。出役人　并預主人。此味し。俗ゆ
一。廿四日。田所頭屋。西。五色の御幣。調う　役人別ち
廿五日。曉。天。御幣。出来。以人。毎し。参る。役人。学侶。内。お
一。同日　新坊。西。衆徒　一。献。あり。坊屋へ。仕丁。とゆ
御奉行。西。　所徒。西。人。参る
一。同日。田所。法師。殘〻。彩坊へ。参る　田所。法師。補。任ハ。所徒
一。馬長児の頭人。五人。学侶の内。法才。ま。お勤ゆ　妻ハ。仏の下。侍り



御湯圖

大宿所 遍照院 預主人 勝乗房

雉子 千二百余羽
兎 百三十六羽
狸 百四十三疋

一九日頭屋くゝ御幣の切より整九六日。田楽法師より行う。
不の饗米おかざりをく。已刻田楽法師ふ殘事
弥くゝより。礼を付をき。其後一献を行う退おす
一同日。敬主人方者和よをかて。法者より。献上の掛物
雉子　都合　一千二百六十八　内　鳥　百三十六耳
狸　百四十三匹　塩鯛　百枚　斗樽　百六ツ　掛をく
右者上くゝ慮くの内方大和国中大名并弥人方より。法献
和ゝり　多ーが　あり　委い略く
五色之絹御幣　七五三年の白御幣　春日　神人　蓋。折。
獻菓子　を不御りの甲冑　野大刀　弓矢　的

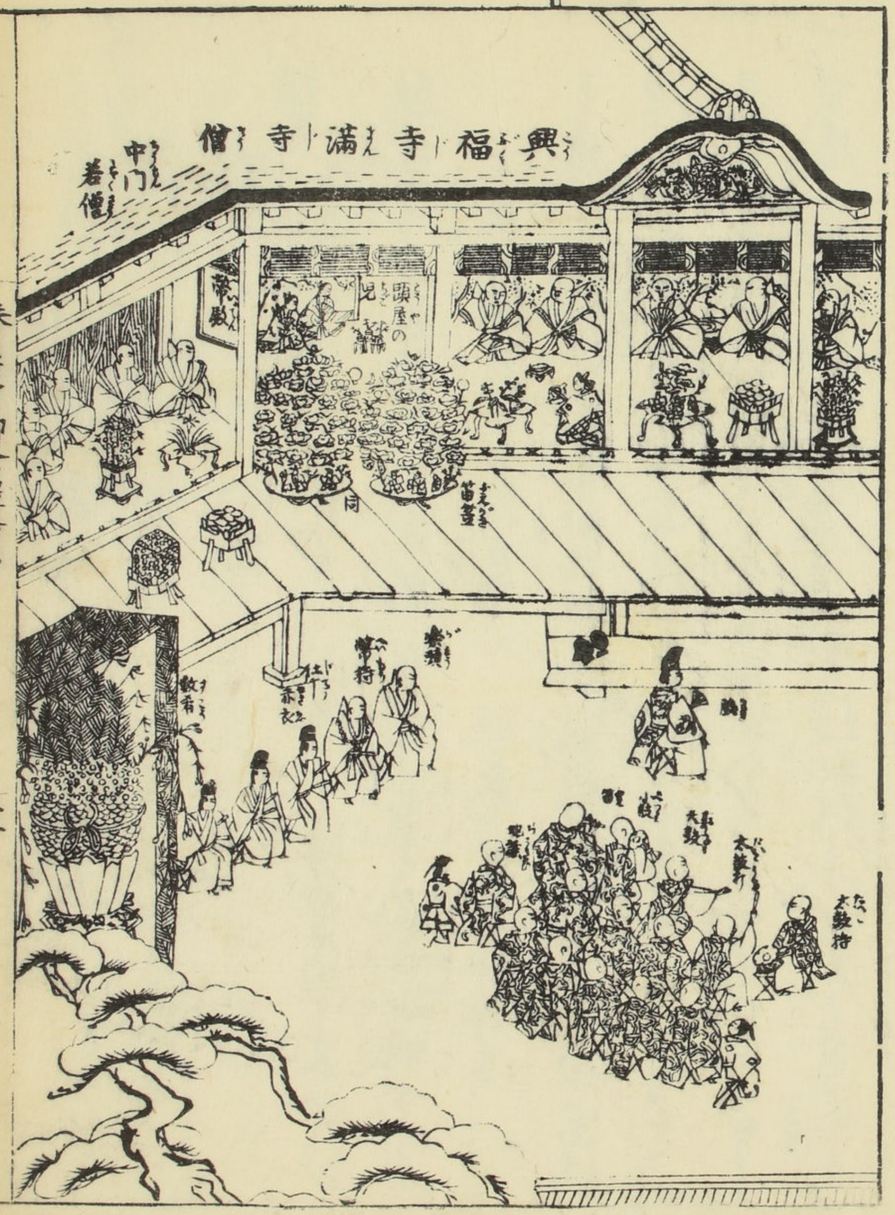
饗米おかざりをく
御湯　来刻庭上まて。巫女　和歌
一同日刻舎五師の坊へ預主人方。射手児を交名ををす
一廿六日未明より田楽法師常殿より児二人後ちの供を仕
射屋、衣徒。中門、白衣若僧。庭上、仕丁列座　其後
不以幣持くゝ僧四人　新座ゝ座の田楽法師。ゝ六
人庭上より二行より。床机へ。糸集ー。常殿より。田楽法師
を人でよびかー。饗米を行う
一　楽頭衣　一具　同重袴　一　御幣持ノ補佐
二　一御幣持衣　一具　同重衣　一　笛水干　一具

一刺貫　一具
一刺貫　十二具
一箒帷　十三具
一裏絹　十五
一鼻紙　十五
一笛笠　一
一太鼓　五
一腰皮　五
一同布　二之
一傘　十五本
一平ノ水干　十二具
一陣帷　十三具
一出腰　十三具
一石帯　一筋
一扇子　十五ヶ
一綾羅笠　十二枚
一太鼓撥　十
一高足　二足
一足弦　一足
一巾紙絹　十二筋
水干ニ用ル紙絹ニ組ル

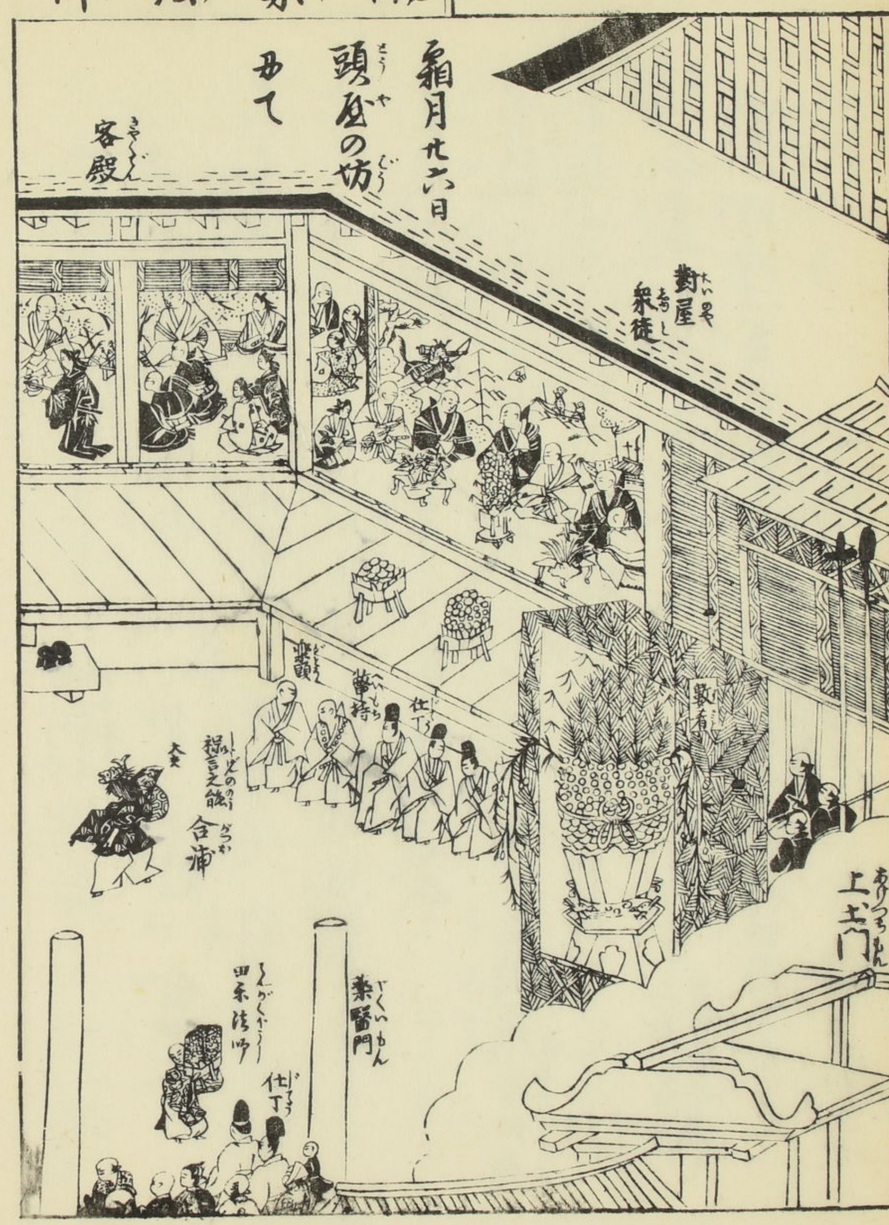
一編木　六
太鼓　五　編木　六　かて小鼓　一合十二
右之通　二通り　田楽。新座ヶ座ヘ行ル
右之外。一鶴より三鶴まて被掛行引之
其後田楽法師庭上ヘあて。舞納おつる
太鼓　床机よのせ。先より太鼓切者ハ持来。手の内
を年い。床机のよ。太鼓ハ。蓋ハ。のせ申ル
能六番　相言　三番　七番　二年番ハ
田楽法師。立烏帽子ヲあて。毎人立合間口あり
菊乃　松巴　経政　あるぶり

一撰　二

能の之圖

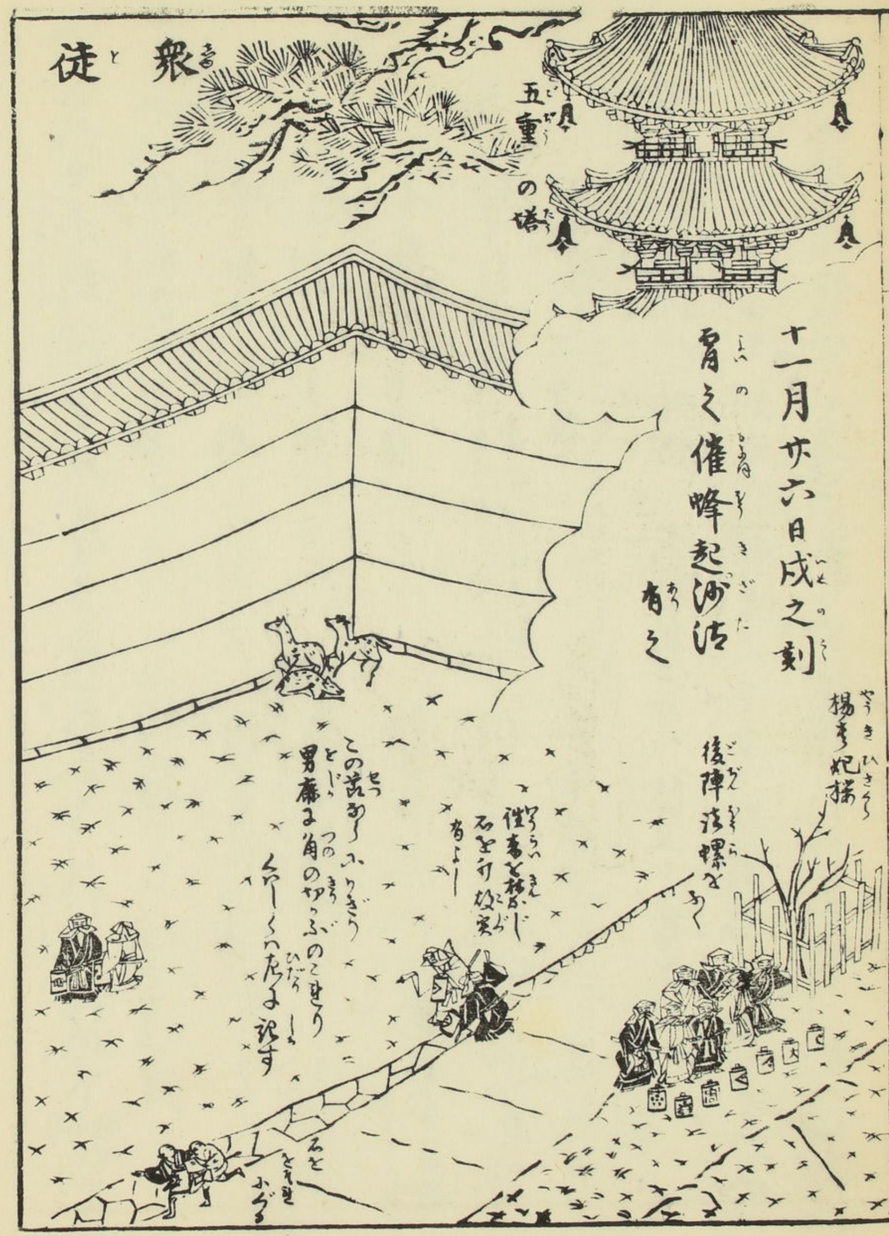

興福寺満寺僧
中門
若僧
頭屋の
同
笛童
大鼓持

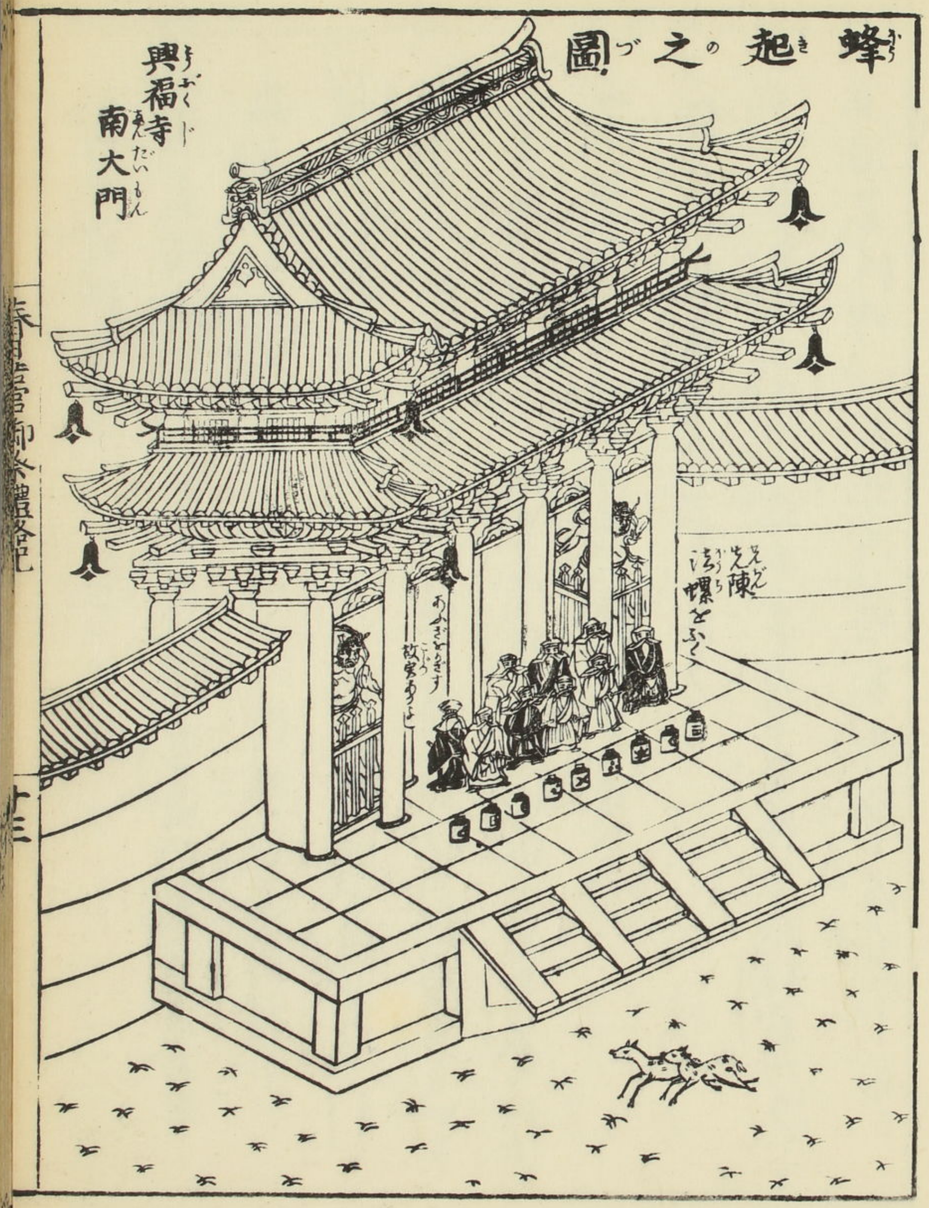
田樂法師


霜月九六日
頭屋の坊
丑て
客殿
對屋
衆徒
數者
僧侍
仕丁
合浦
四条法師
仕丁
薬賢門
上北門

又ノ年　志のぶ　合傘　雲鬼
箱崎　加い　合傘　常政　ちくぜん
狂言　山福田　ちま彦　山伏　猿子ノ門ポ名詩
能　お海　田系法師　ど家敏　ちちゑ　ちまり　ちゑ　小鼠
雷電　積文　亀足　竹ちる
三度中剃　白幣ノ法師　坊頂載し　田系法
師　新産ノ産　毒蛇信元　庭上ノ奉幣　角ち
文ちり　白幣と捧ちり　春日夜叉ちり　大宮若宮ちる
一三度坊成児毒人　清有よりも寺信和代し　春日駒叉ちり

一廿六日示剃頭五人　春日夜叉ちり　的射杖の下ノ門ド仕丁一人
一ノ鄙志刀　十振　的待　射手児
二中志刀　五振　扈従法師
毛刀　十振　頭五人　皆鳥帽子　直垂　袴　素袍　藤袴　御衣　大口
小志刀　五十腰　素袍　藤袴
神ちる十丈　尾髮ノ紙ノ紙ノ　皆鳥帽子　素袍　百鳥足余　供馬
法幣　五色絹　年ノ年ノ　三ノ七五ノ
右名ちる
雑子兄理国　移婚領　大宮若宮　就上ノ　先き　ちず
二の宮居ノて　射手児頭五人　下馬　大宮　猿門の内ノ内ノ
奉幣ノ載　神ちる　猿門ノて　神五信元　神前ノ　引返後ちる


五重の塔
衆徒
十一月廿六日戌之刻
宵々催蜂起沙汰
有之
揚弓的場
後陣法螺ぶく
僧侶ども
石を打投
有よし
この時ふりきり
男藤ヨ角のかつぶのこまり
くやしくいたよ申す


蜂起之圖
興福寺南大門
陣法螺ぶく
故実有よし

神主祝詞有ル　神ヲ
一若宮系統神主人、祓ヲ児、壇上ノ高座ノ前ヨリ著座ス
面氣ヲ生ジ、物座ヨリ著座ー　御幣以載ノ後
神主祝詞并軾ヨリ　神ヲ右ヨリ
廻シ、高座ヲ下ル　引ヲ上ゲ、弦置ス　神主祝詞有ル、ハガ
キノ前ヘ退ク　額ヲ人、神系ノ細縁ヨリ立ツ、神
系ノ向ヨリ　祓ノ児ハ、神ー系ノ図ヘ入ル
神系　孔雀ヨリ　八乙女ノ舞
次ヨリ下向ノ装束ノ旅系ヲ　流場ヲ
同日田系ノ所　大宮御神系ノ御幣後ヲ

一若宮御神前、御幣後ヲ
向ヒテ座ス　藝能ヲ
一廿六日、巳刻、若宮殿大床ヨリ神系ヲ
并ニ面ノ方、男根ヨリ復面ノ紙二ツ結ヲ　神主常住ノ稱宣
御系御用ヲ　柳ヲハ若宮ヨリ典丸十ヶ山入ヲ苗山
一廿六日夜、戌ノ刻、宮後ヲ　催ヲ
裏頭討刀ヲ、数人、奥殿寺、東南ノ角、大湯屋ノ
図ヘ集合ス　法螺ヲ吹キ、次ヨリ、数人、大高座ヘ
ヲノ方ヨリ入リ、酒ヲ流ヲ　大高座、太橋ヘ

い。住吉を禁じ。石とおし。攝州揚米紀伊の
さん陳。南大門へ進る。壇上より並立員を吹合せ。まうり
南大門へ入る。南ろを通り。西ゆを通り。坂実有
毎年四月十六日。早天より蜂起初める。又奥信濃の住麻
舎。執行の長い。前日中別。佳悦の蜂起。ひりり有り
。揚米紀伊。住吉。奥信濃より。玄蕃と云う。信濃。紀伊。
。はい長鹿より角ろく。切かぶあり。鹿杖より取り。弟小者り
持くうり。書麻とおくそひ。又已が長やよの憶めとおく
そひつき合。所くみて。午るあまで。ひやそつ有。寛文十
二年子年八月より鹿の角切。初り。春より取りひゆ。

持。鹿茸生ず。夏小刺。かくそろ。弟小者。猿と遣ひ
悪気ろく。人ども知ら。思儀の人ろを。取りて。ろろる。
春日大明神。常陸。麻。鹿。信。麻。信。ひ三笠。小稲。せ祈。
麻信ろう。白麻。より。麻より。春日ろる。三笠。小より。信ろの。
大明神。麻より。古ろ。ろ。古記より。信ろ。社。本宮社。
神麻ろる。友ふろうの。大禁の才一。とり。仕
同別。舎立。信。猿。ふく。仕。公人。戸上 拍子 人。人をひて
若宮。神。殿へ。ろの。別より。神女の。御業。内あり。人
内殿の。より。平。伏し。神女の。御業。内。申上。南。女の。糸
宜。毛。毛の。内より。立ろ。ひ。祈。と。答。
子別 才二歳 世別 才三歳 皆初歳同

御旅所御

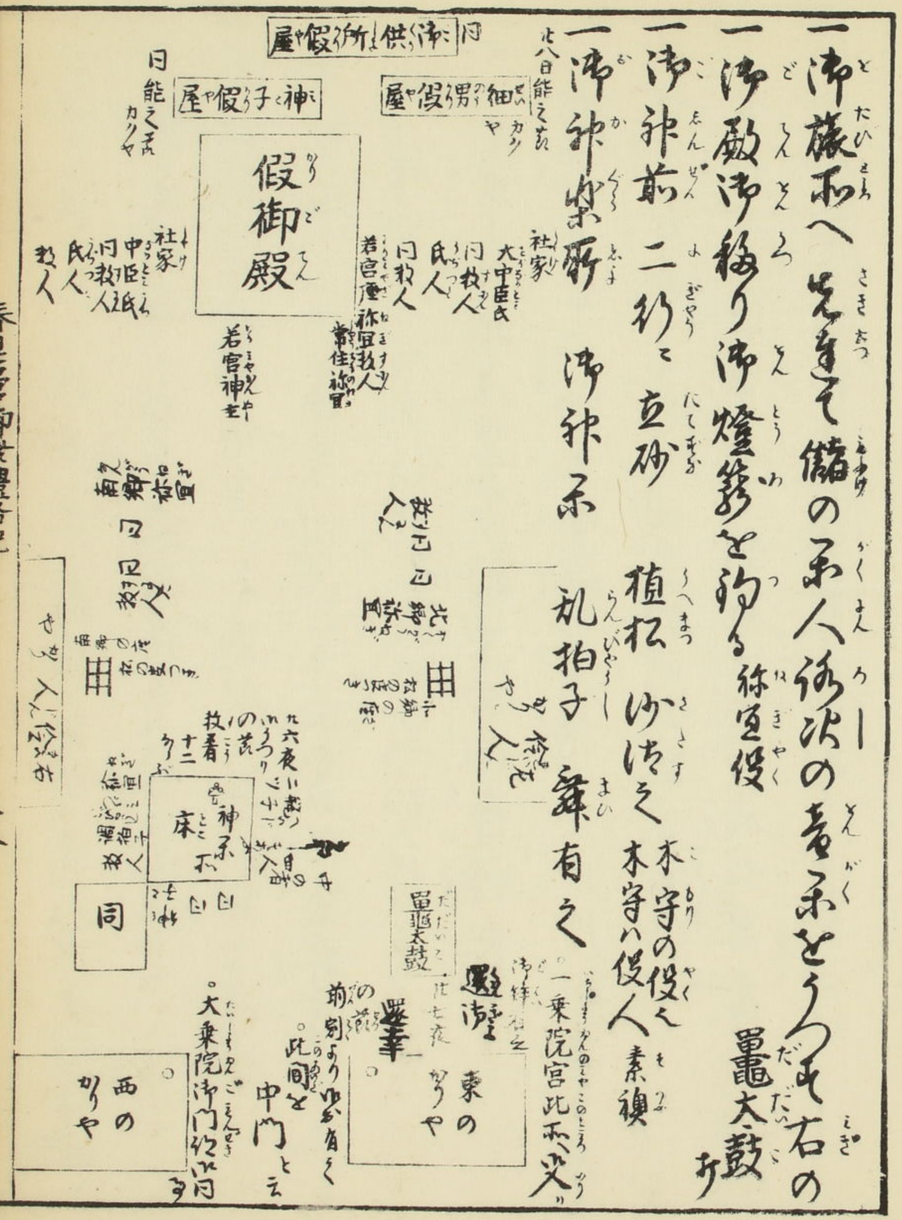
神幸之圖

一両門を海寺の僧　社頭五ケ度、系集せしめ、第三度く
御葉内く別。車やどりうか。御神輿の供奉仕り
一同五く別。第三度の。葉内く後。社家祢宜　并　楽人
若宮ノ御神前へ仕も御神輿く義一切燭
と禁ぶじ酒さ。　若宮常住祢宜燈上のかか
ち聲ゑ。第三度の礼声と。三聲とる。こ後楽人。
礼声を養て。又祢殿ゑ向ひ。身敬搭ゑ。こと
唱殿　身屋の間のうけ祈ゑと　唱人養ふ三度搭ゑ三
一第一番　大燈り　大樹明　祢宜取ゑ
御薦物　土器ゑ組付　御祢次焼之　祢宜数十人

右御神　御神輿御供　若宮神主若宮常住の祢宜
守護　[illegible]人の[illegible]ゑ。敬言蹲と。こ[illegible]ゑ。法人一同ゑ
声を和ゑ　御側　南郷　小郷　若宮祢宜　神の枝
ゑ紙ゑ切ゑ。ゑ。ゑ。

火を禁ずるなり　春日権現験記第七上略　又人ゑ
手たねよ。寅の燈爐の火。一度ふきそそぎり。
ゑぐく大明神。いでゑ野行の時。いゑ野行の
時し。火をけつるまてうんをけりとゑ
○警蹕　警言ハ　威粛。蹕ハ正行人。ちゑのお入ゑ人を
いましめ行しめ。往来の人をとゞめ。
○六道と　鹿乃とゝ　日本験記第六。春日の六道と
撰集抄。西行法師。六道とすゝ又春日横門の
ゑ地獄谷なり。近ゑ比まで死体の捨人ゑ侍ゑ
みて。ゑをつゝ立ねゑ。ゑを手ゑるなりゑ比ゑ

一神藏和へ　先きて儲の弓人紙次の書弓をうつて右の
一神殿神移り神燈籠を移る　弥宜役　罷大鼓
一神弁前　二列ニ立砂　植松　ゆはゝ　木守の役人　素襖
一神弁楽所　神弁示　孔柏子　舞有ゝ　木守ハ役人



一別当五師　神主奉幣有之氏人文丸神主祝白

一三綱之御幣　祢宜文丸俗名啓白如之

一修理目代御幣　俗名　各退散　御の剣ノ長ノ

一御神前　高畑常俊祢宜　日畑祢宜守俊　一拳

御神楽　信人系図の数後非人ひろもり

一廿二日早朝頭屋児客殿より御寺僧お仕

庵上　六二紙ノ上。楽頭幣持田系法師　彩産年産。

仕丁床机　居　田系法師一献式之

金張五色御幣二本。彩産本産文丸　休幕居人紙数

一同朝別当五師。権別当并馬乗児ある。五箇所当坊用之

一献式之有之　同休幕居人紙

一同辰刻　社家祢宜本御旅所御神前人お仕

一同刻　別当五師。権別当　三綱　二条丹波　毎門法仔与　二人お仕

各興ヨセ。一人でお仕　福寿院因幡

別当五師。神前法式。南大門交名　松の下源り

仕丁ヒ以て下知

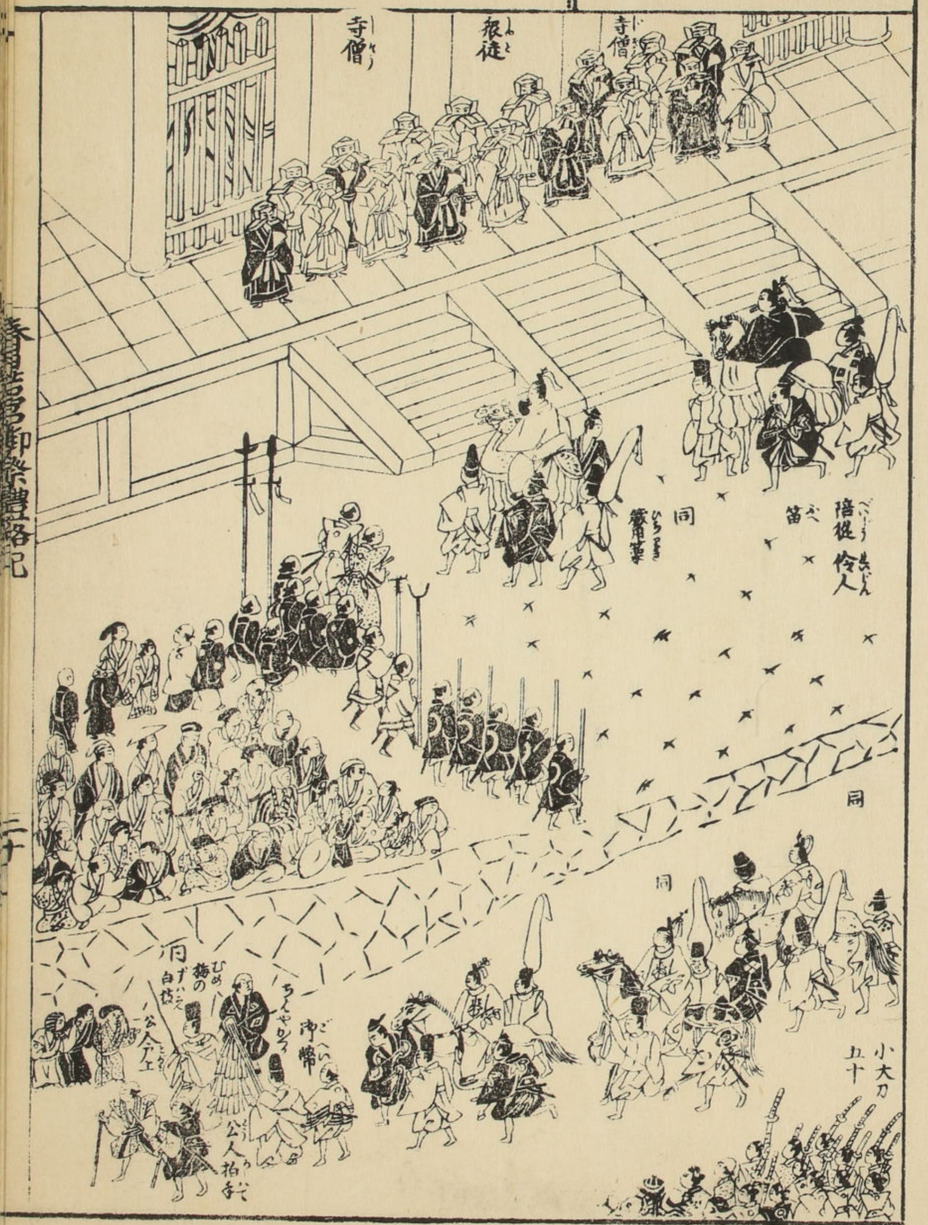
一同　当殿巫女　神主男祢宜　小鼓　中有　素襖

糸掛猪人。神主を養し事　伯柏子　烏帽子

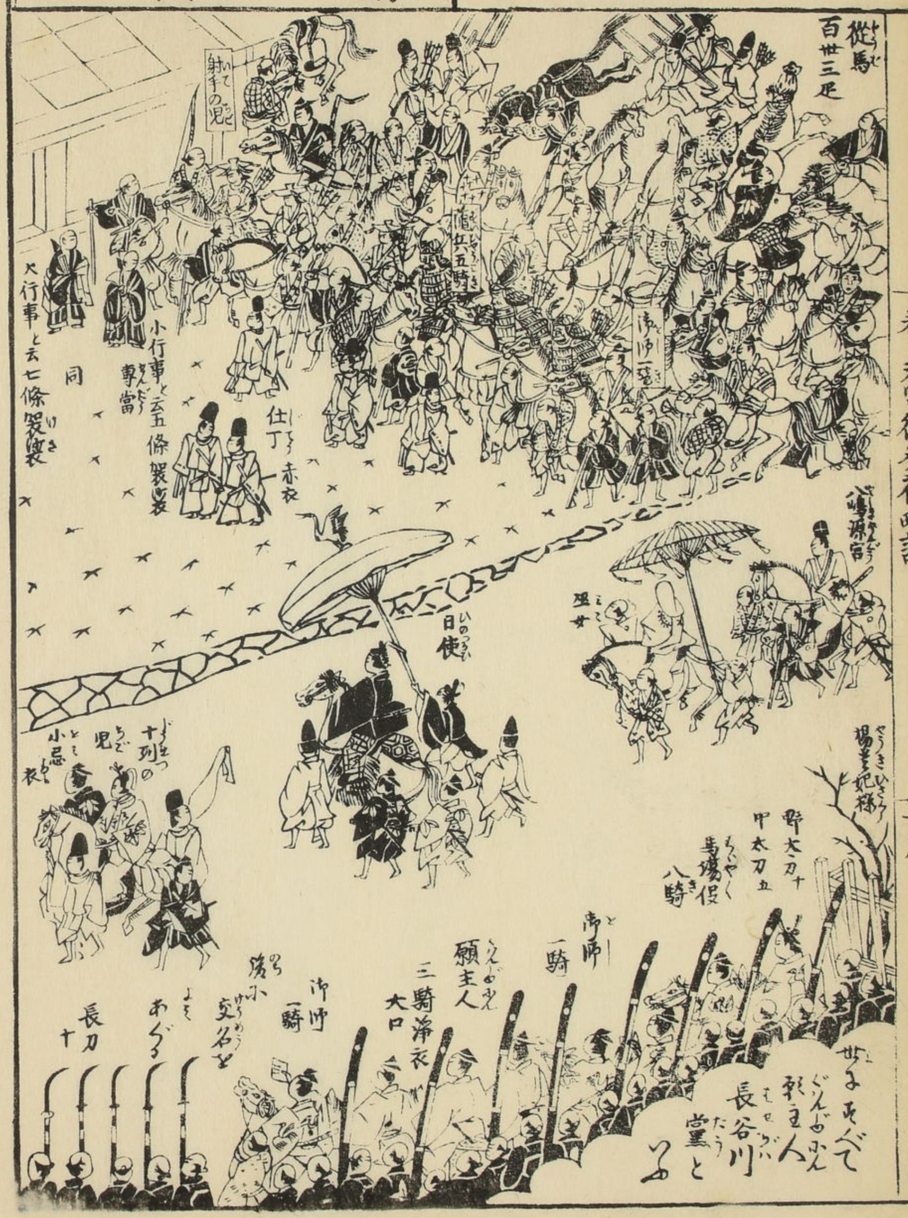
一同已刻頭屋人。射手児。随兵従る。馬場本宮本。小人

橋本町分東人。さくの池の小ちりを。東人坂原を

名の之つ圖


寺僧
寺僧
衆徒
陪従 伶人
笛
同
管笠
同
同
同
小大刀
五十
公人左
公人右
公人拍子
梅の白枝
神帯

南大門交


射手の児
従馬
百世三疋
随兵五騎
神馬一疋
大行事と云七條袈裟
同
小行事と云五條袈裟
仕丁 赤衣
日使
場所死縁
野太刀十
甲太刀五
馬場役
八騎
十列の児
小忌衣
神馬
一騎
願主人
三騎浄衣
大口
神馬
一騎
長刀
十
あぐろ
長谷川堂と云
世まもべて願主人

らう又西へ南大門より出るまでぶ　左後の役をお侍つ

南大門交名圖あり　壇下　専當一人　大行事ト云　七條袈裟　同一人　小行ヘヨト云　立條袈裟　仕丁　教人　赤衣

一南大門壇上　東寺僧裏頭　八人　面裏以上云ハヒ

中　左後裏頭　討刀　八人　後ふ教人ハ〜ひ立

西　寺僧裏頭　八人

左後舊記ニ云て古礼とお守り仕丁ト和く

外一番　田原法師　表座　壇前ニ二行ニ立ラル

一座ハ藝能お師　壇上ハ中の壇ばかりのわきに人で

左後寺僧の列を通り門の内へ　花笠の法師

ラる本履ぬてラる老人ラる友を奉本履ぬ先のラ　田原法師委尤記

同一座右同ラ門の内へ入り後ふ殘お廊退素の後門ラ出

一梅の白枝　戸上　捧ラ　赤衣襷布掛

白妙の御幣　拍手　捧ラ　同ラ　戸上ハ公人一瓢　素襖著取ラ

十列ラ児冠の中ハ小忌衣の衣　拍手ハ同　二瓢

一日使　冠の中ハ蓋の作り花をまとふ　ラる上ぬて南大門前のたこ

我ラ敬下九条法性寺九条の勅ラ勢ラ御ラ蓋日

奥福寺食堂の前。細殿まで御幣幕居　御お仕侍ハ御不

例ぬ御裝束を樂人へラぶけ下ラ蓋日の御役ぬ

出ラ。日の役と名づけ

[illegible]彩間の御裝束。弟人下

[illegible]

日使ハ　御旅所。假屋ぬて二ぬ[illegible]ラり

一陪從　二人樂人お勤む。冠　左の方ハ山吹の　南大門壇下

る上ゆえ簧笛音不あり

一郷巫女　柳生村巫女　横井村八幡源宮

奈良町巫女　数人る上　下同

若宮御殿巫女　八乙女　八人ある内日あり

所使より催ふ〳〵より。相改め老人　和歌

後より神北の金綱の紙より入る笠。持渡る　紙花をもつて寿を

俗よ大明神。御新向の時ゆさたる笠よ云

一細男六歩　白浜鄂二人　素襖袴二人　大者不ある

白張立烏帽子同壇下ゆ　委不記下同

尚西不〳〵。長住も

是神功皇后の出時。磯良の故事のよ。藝能神ゆ

山城国。離宮八幡社壇の左右ゆ冠をたる人形の頭ゆの付る

板あり。細男と云よし

一猿楽　今番一座ゆ不相勤　和世も勤しよ

南都芝居の上人ゆ。立ゆ。物衣の役者老人で

孔あり　長住のゆ　大夫　つゆ大夫　眼　鐸

素襖著芝居の上人ゆ　今番ゆ弥宴の舞も

長住のゆ不役者付をひ

金剛　保生　西座ゆ不ほとゆず　早朝より〳〵ゆ

金剛座ゆ。奥猫ゆ東南の隅ゆ湯屋へ仕し。松の下ゆ勤

保宣殿い奥殿寺。東乃不開門の内東宮の軒より西位
し内松乃下れ勅　菊乃中殿く芦ハ。勅世ち支かりや面ちつ
東小長の角よしと春カりやと東西のよう
一馬長児　五騎　松の下ゆ列よりく園あり
一騎つ。面ちつ壇下よるを扣く大童子ち撃よ信官
傍位と名乗る　名乗ゆるい伝下れ改
一競ち五双　三綱ち。一騎で伝法眼位のみるはと名の
一長谷川黨　的持　射手児　随兵五騎　門時
沖師ちるこよ立ちり国孫君と撃よ交名を傳らる
一従ち百三十三人
右西へ沖ちるこをと下のそり。持ち付はまりと

弼へ持ち下町へ引き。少く東西所早。支より東へ早
引ぬけ。面へ。但し奥殿寺。所方の和を廻り
ち多居の小多り。ち。休幕居よ入り。松の下
乃沖り流後よりの使をお引て。松の下を沖る
一騎ち方　中ち方　小ち方　長刀
先ち東へ真よ。ち多居前。兼地よ。糸ち。あく立ち
一頼ち三人。東へ引。ち。の。ち。ひ。面のの内く
ち。ぐ小休幕居小入り。後ちどゝくよし
一沖師三騎　ち傷侍八騎
同東へち多居の前より少く。弦弾陰童、引。射手児

隨兵と同じく休幕居より入り。暫時しばらくして。大きなる居まく。南に向かいらふる所。松の下の流りをおもち流るる文より東面の山乃。休幕居より。一ホより入り。流れ出るの時芝をおく　御所二人。風呂。あさき直垂石帯　ちかみてあり南方つ文名相添。各退散せ

三度田ホ流御所。南方つより。方角およ西く流る。同一度

渦金町墓門ホ　初宮方の外四角ゆて。一度て藝紙

お勤む　今ハ東面の町ゆしおる郭

初宮方明神

一御殿　神祇官八神殿　三御殿　春日大明神

二御殿　伊勢方神宮　四御殿　住吉大明神

三代実録貞観十年十二月廿五日勅ヲ大和国二下シ春日ノ社ノ時供奉ス騎兵四十人執杖六十人

右一ノ御殿ハ開化天皇ニ御勧請也

殘リ三社ハ崇徳院御宇。長承元年ヨ勧請也

預主人ニ　貴方和田ニ地名保延二丙辰年九月十七日より執行今ヨ勤ル。先祖者方流ル

長川　七貫川　平田　葛上　乳脇　散在

是ハ三居極より名と成ル　長谷川郷　平田村　葛上郷　乳の方他ニ居住散在。

其ハ前ハ方和一ニ郷ニ清士一郷二郷或ハ五村或ハ七村を領ジ。御祭礼を和勤。前日より。指して勤を献上ス。自分馬上。従士相具シ。ヨリ入て。若干敬方宿

不と云。境内廣く。七柄敷ニく柵と。三年ヨ献ぜる

やうに獻りけるゝ故又かゝる歴々より献上もあるべ
し也。文明。明應。天正。年中。献上物。折紙。拜
殿。御簾。方々有之よし　白鳥　鴨　鯛　三種
御神楽　八木　百石　同五十石　殘米五百文
三ヶ所折紙数通之内出物略
天正年中大閤秀吉公。大和一国の領主仰付られ
ける比を爭ひ。威勢強きゆへ。威を
国智。仰付られ。ふ殘。皮を。へ遣さる。ことふ国て御祭禮
お勤被者。ゝ。ゝ仰付。ゝ。。。

孔のすゑ人乃娘ゑぶすあゐて芝田ふ躍りせて又ゑ
ゐ　る倉院ゆ宇　安元三年ノ比ノ

一天平記二十七　人皇九十七代光明院御宇　真人和ゑ
年六月十一日ゆ京河ゆ京ゆ　彩屋ゆ屋の四ふを合也。
ゐ　ゑ　ゑ　ゑ

立ちうべき者用ひて流摘る者し　警固の清士殿の面方小却へ流摘る。相濱退散也

一頭屋し児　攻寺。僧侶從者饗應ありて摘る傷ありと

右松の下。清り社家。法供人退散也

○神旅所神前之清水

一二十七日未明より神社お賑く。社家祢宜お仕

神樂の音やこゝ　松の下清り日使の御

幣ちかしの榜へ　とそて神系供人退く

中門西の假屋へ別含立師。指列含三綱二人お仕也

專當二人　仕丁東向　別含立師。仕丁を以て法る下知

一梅白杖　御幣戸上拍子中門ゟ入東の假屋間立列

一十列之児　日使い神おとるゝ上五て南ゟ通り假屋へ入

一陪從系人　二騎　神おの方榜中門の南より神お

ゟ向ひ。るゝ上ゟ五て筆築笛音系あり。東へ通り假屋へ入

一巫女　源宮為殿巫女。正面ゟ入。神おとゝ一退く　傳摩を

一猿系　素ゟを見り中門ゟ拍を結ふ　竪三寸　横二寸　松の赤皮付

今春屋の長指のゟ。小刀ゟて。拍の結縄を切排き。中

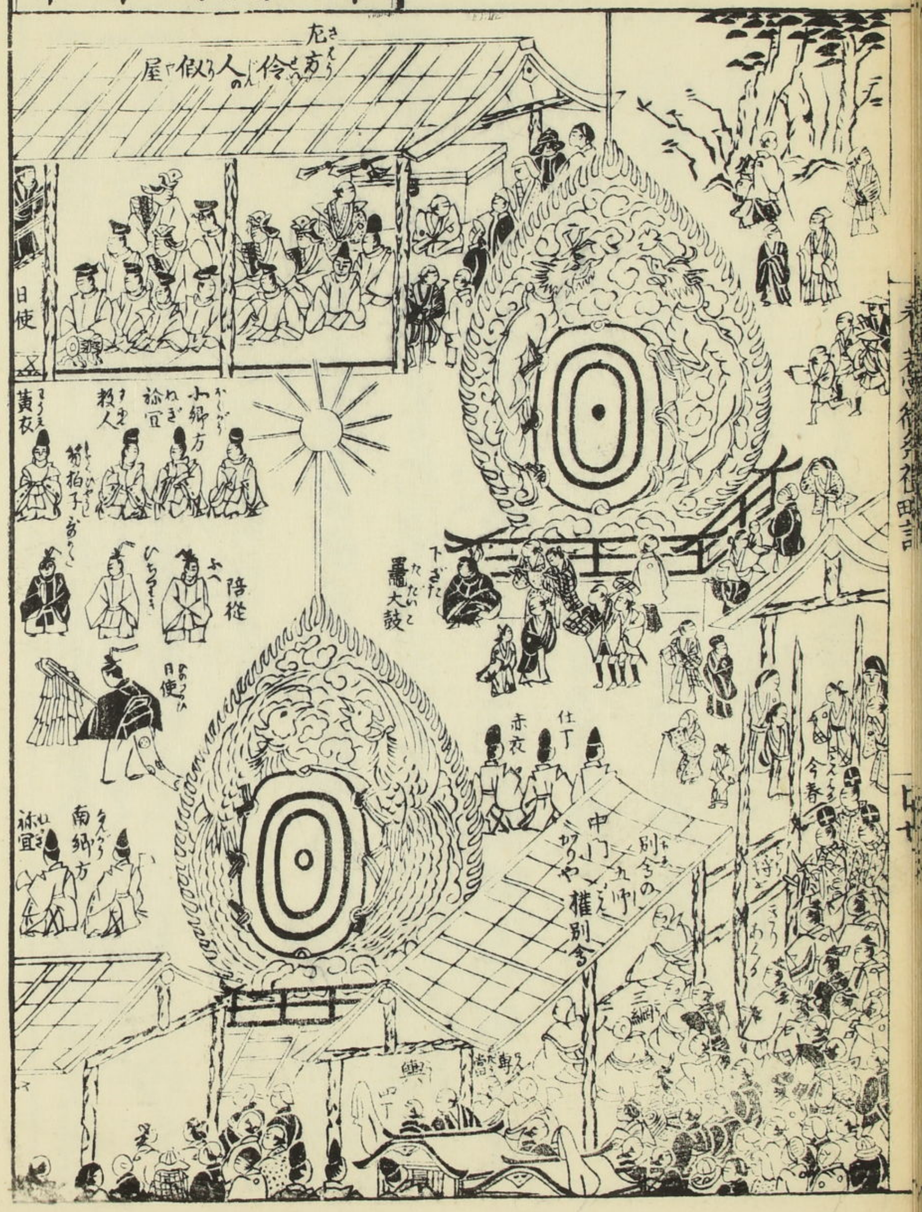
門ゟ入り神前を祥し東通り休幕居へ行

拍を切ゟ今春ゟ。非蓋の年ハ今春の長指ゟ勅

同一屋　神前を祥し　休幕居へ行　八日能の先後囲れ

一日使　十列之児　陪從三人　笏柏子　ひちりとさ

御旗所奉幣



井切将の之圖

笏拍子ありて役人　赤ぶくろ着人　氏人　社家　神官　各東の假屋よりか。神あの東側より立ち。

神幣　拍子より。寄付へ。濱一寄付西面あて日使、濱ス

日使奉幣を捧　若宮神主神あり立ち。

神幣傳受。神前祝詞あり

一傳供之神供饗進也　沙器を東の方敷の方小屋へ。

東　社家　祢宜　数人　日日日　日　日　大　御幣　祢宜捧之

御殿南向　東西二行より　おのゝ一人で　軒　日

西　傳供也　祢宜　日日　日　大　散米　日

十天樂　東西の假屋より奏之

同時より。西の假屋あて　別含五膳　檜別含

三網　郷食膳あり　專當給仕　別含檜別含

南向て食也。神あり向て。三網小向て食ス

一十列之児四人　を人で。るを引也。神あり三反回り退

社家左右方
祢宜二行　如圖

御殿南向

西天之　芸人舞楽。東西の假屋あて御

東遊。十列之児四人舞之

一馬長之児　るを上あて神あ二反回り退あも

児の笠より。出るの尾をさ。馬は五色の細き紙を付り。

退おの時。大童子。これを見。神あへ投る

振鉾三節　　東西の假屋よりおて舞うく

萬歳樂　　延喜系

賀殿　　地久

臨時　祈預ホ有うくはいい。舞ホしるふ加へ舞

近年西淺二年辰年　央宮ホ　數多　有うく

立鳥帽子　白張

つきむーろ　変

一細男　六人　神ホ舞　奏之

二人座して笛をかく。二人覆面を蟹を勝ょ敷を付片

手をおろ〳〵立おて。沿ふ面よ退き座も又二人

ふくりんを蟹を右の袖を掩て立ち。沿ふ面よ退て

二人ふ

一猿樂　一村　神前ホて式三番ヲ三人。十二月住来ヲ

一田ホ法師。新座ホ座。一座で奉幣。二物よりび藝ヲ

是まで。朝座とい　社家。祝宜。五位。三綱。諸役人。

。競馬五双今年　退おも。神おい祝宜おつよを

寛久年中まで。ヲ二し出今勝負

一流鏑馬　弓を人　流役人。ろお楊め東よ立ろ

。馬場ヲりとて。ろ場役五人。立ろびる場を西ろ海ろ

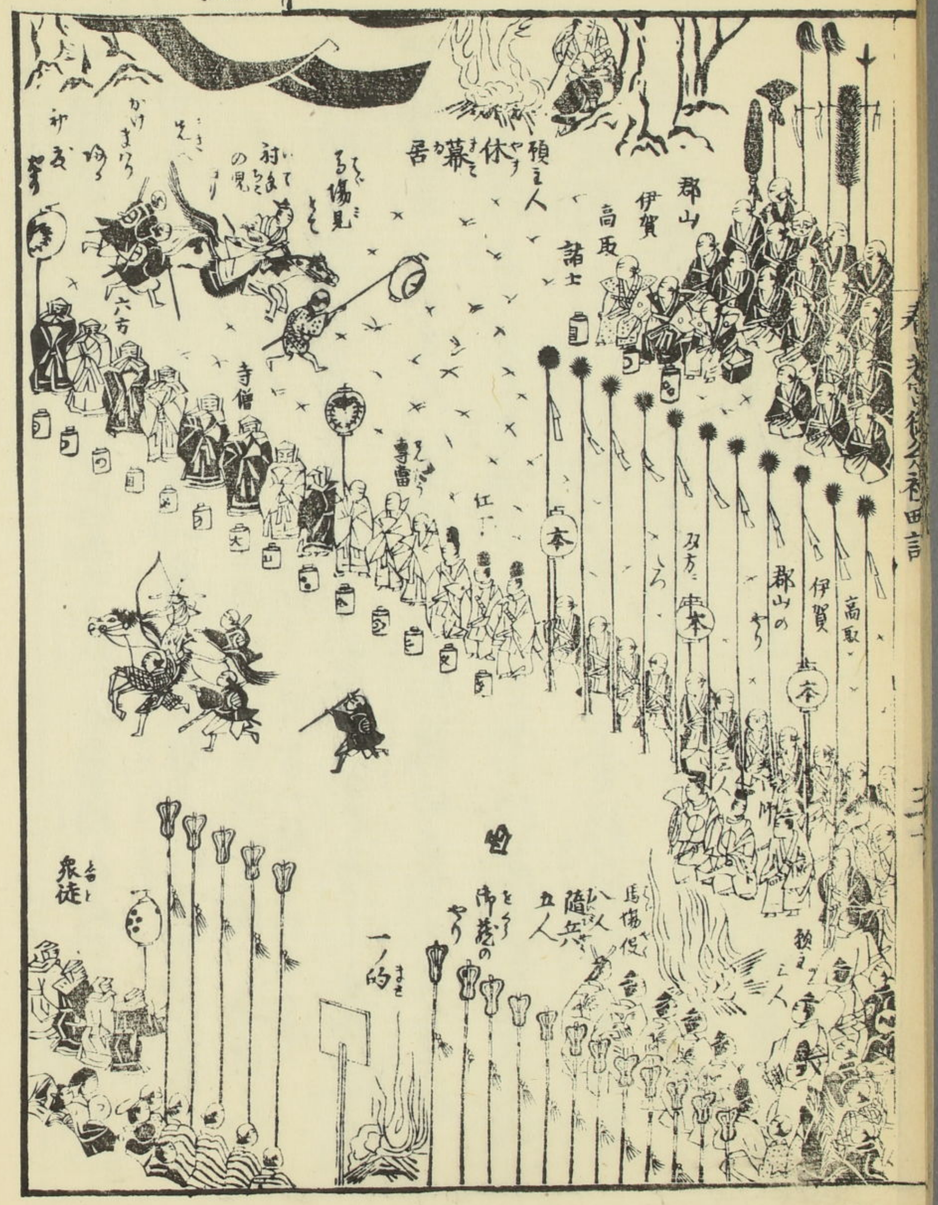
。地刻とて風ホ。赤物衣日月の金銀紋。演芸物要

石筆ホ立ヲ。立ヲ。書。弛ろ書て。地の弓数を汁又的を

いて。横弓を汁的ホ。ヲ。ホ同儀式神ホ。的い初ろ。物ろ

。ろ場見とて一弦ヲ。的ヲ。ろけ物の後の後へ射。西ろ内ろ

流鏑馬の図


郡山
伊賀
高取
諸士
郡山の
伊賀
高取
本
本
本

○口取小揚児　口五口位裝束地別と同　揚射手的を取る弛的の前に祝并作法を立ゆる

一射手児　ゐゑて儀式有　扇ようーろ、一二三の的を射る七五三

敬矢るかより内へ射り　春日神者垂跡擁護之神故也

勸請之神者敬矢ゆ内より外へ射

流鏑る相撲頼を人諸方雲間諸士諸役人退散

流鏑る同時ゆ神おゆて競る勝負舞有之　是時神を

陵王　納為利　お仕ゆ

中門還りて完後お仕し。中門ゆ立ゆ

是より久度　燎火　神おゆ左右ゆ催く

○一乘院宮　東の假屋、沛お仕　寺僧供奉

○大乘院沛つゆ　西の假屋、沛お仕　寺僧供奉

若宮神主社家徐宜諸役人お仕

中門還の章ゆ

散手　貴德

一相撲十番　沛幣帛二本　素襖著　二人　神おゆ、二列ゆ進を奉れ

支證として冠細纓老懸掲衣ゆ弓を持矢を

負ゆ人神おゆ隔ゆ　上座二人左右ゆ　下座二人左右ゆ

持おゆ　立

支證上座一人立

支證下座一人坐　大口

沛殿

右同一人立

相撲場

右同一人立　大口

相撲役人敬拝ゆ敬拝として弦を持ゆ稽古して

左方より左方を下よりさし扱をとり。
神主へ扱をとり渡式　右方をかたげ退く
神前へ向ひ座せる間後より座布かさねあり
りけ　又あり　袋義布十文　扱持ハ初終二度
相撲番等不　扱頭　落蹲
神主の相撲出を消し手水作方出と榊ぶ
還幸　戌刻。遷速あ。神宣扱人。榊の枝を扱階下
より山のごとくお集り数を渡と見さきと鉾を作人
一同より拍子和一番蓋し伶人　東のたとの西側より立列　還城
樂を奏を六度より書不拍子加ハ　神幸より

一両神門を　寺僧供奉を手伝役人　雜人
一御本殿入神　神前不　八乙女　乱拍子ホ有之
一二十八日神旅所後日神輿　猿楽あ度お勤之
頭屋ゝ児二人東假屋ゝお仕　寺中僧侶東西
ゝ假屋へお仕　流後中門より立列　専者東側より
座を　仕丁。同東側より床机　仕丁二人西側
神殿ゝ階より祓頁お仕　圖あり
休幕屋を東の山ゝ内より坊ゝ設　ゆ児寺中僧侶流
使者者仕丁名饗あり

後日御能之圖

大乗院
一乗院
頭屋休幕
寺僧
若僧
銀徒
田子
能の
芸
仕丁
祢宜
湯奉行
諸役人退散の後
田子法師
海よハ万の魚まむ
ゆづるくろうゆづるくろう

餘日暮　祝言　狂言　左右の燈火

渉餘の御供人退散の後

一田楽法師　舞屋　中門の小神あるに向ひ　焼き殘りの燈火

打入て参る　同口　舞人立あがり一連舞ひ有て一献供儀あり。

[illegible]

寛文年中　芝者より湯殿の時　舞屋　[illegible]

享保二年十二月より祭礼御執行の儀

[illegible]

享和元年[illegible]より[illegible]

[illegible]夜より[illegible]

御祭禮略記　終